

見て楽しい

History of Dentistry
in Japan and West

大野 肅英 Toshihide Ohno

羽坂 勇司 Yuji Hasaka

高橋 紀樹 Toshiki Takahashi

歯的

Delightful Displays

博物館

in the Dental Museum





日本編

見て楽しく、読んでおもしろい歯の歴史には知られざる驚きがいっぱい。
現代人が、タイムスリップしたい憧れの時代とも言われる江戸時代を中心に、
肩の凝らない歯の歴史の博物館へ皆様をご招待しましょう。

お歯黒と浮世絵 | 3

江戸後期には、伊勢参り、相州の大山詣りなど信仰の旅がブームであった。既婚女性が旅をする時には、お歯黒道具は荷物になる。そこで、房楊枝に水につけて簡単に染まるインスタントのお歯黒（懐中お歯黒）が登場した。



浮世絵

浮世絵（錦絵）は、多色摺りの版画で、桃山時代や江戸初期に流行した肉筆の風俗画や美人画から誕生しました。

浮世絵の題材は、華やかな江戸文化や娯楽をあらわす遊里（遊郭）、芝居の情景、美女、役者、力士、風景、花鳥などです。美人画は、女性の様々な姿を優雅に描いており、見るだけでも好奇心を誘います。鈴木春信や喜多川歌麿といった浮世絵師たちは、評判の水茶屋の美女、浅草寺の楊枝店の看板娘などを描きました。浮世絵師は遊里のなじみ客となって泊まりこみ、朝の歯みがきやお歯黒をつける化粧風景など、遊女が普段は見せないしどけない姿を描きました。

江戸時代の女性は、歌舞伎役者、遊女、町娘などがモデルになった美人画を見て、流行の化粧や髪型、衣装などをまねしたのです。浮世絵は、江戸の人々の生活や風俗、流行、ファッションなどを写し出す絵画と言えます。

懐中お歯黒

伊勢音頭に「♪伊勢に行きたい、伊勢路がみたい、せめて一生に一度でも」と歌われているように、江戸の庶民は伊勢講（伊勢参宮を行う信仰集団）でお金を積み立てて伊勢参りをしました。その他、「富士講」で富士山に、「大山講」で相州の大山に詣でたり、農閑期には湯治に出かけるなど、庶民は旅をかなり楽しんでいました。

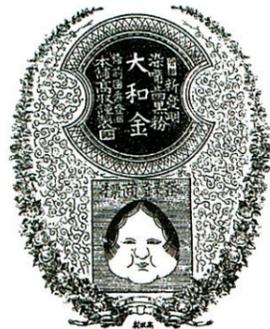
女性が旅で移動するようになると、房楊枝を水に浸して粉末をつけて塗る「懐中お歯黒」や「道中お歯黒」が誕生しました。これは、現代風にいうと携帯用のインスタントのお歯黒です。

懐中お歯黒は既婚女性にとって便利なもので、お歯黒道具一式を携帯せずに身軽な支度で旅ができました。江戸時代には、公卿や上流階級の女性は懐中お歯黒を常時使っていましたが、値段が高かったため、庶民は旅行時やかね水がうまく発酵しない日だけ使っていたようです。

備前焼で有名な岡山県備前市に、香登という地区があります。香登では、江戸期から懐中お歯黒を製造し、村の450戸のうち100戸以上の人がお歯黒の製造、行商、包装紙用の和紙の製造などに携わるほどでした。香登の懐中お歯黒は歯がよく染まると人気があり、製造者によってそれぞれ「ぬれがらす」「はやかね」「大和かね」「おたふく」「大黒かね」という商品名で、全国に販売されていました。京都のふし粉販売で有名な川端屋、井筒屋にも卸していたと言います。



9. 江戸丁字屋製「麝香入り懐中御歯黒」のパッケージ／江戸期。



10. 香登の懐中お歯黒「大和かね」「はやかね」のパッケージ図柄／江戸期。



香登の独占だった懐中お歯黒の製法は、明治初期に成分を分析され、香登以外でも製造されるようになりましたが、皇太后と皇后が明治6年3月に眉刺りとお歯黒を廃止されたのを機会に、結婚しても女性はお歯黒を塗らなくなり、白歯が多くなったといえます。それでも中年の既婚女性はこれまでの習慣からお歯黒を

塗っており、懐中お歯黒も明治期～大正期まで販売されていましたが、ついに需要が少なくなり、終焉を迎えました。その後、香登のお歯黒業者は菜種油や白髪染めの製造に商売替えをしましたが、白髪染めに転用したお歯黒は、髪は黒く染まるものの、ごわつく欠点があったそうです。



11. 「さとえ草をしへ早引」（国芳・画）／江戸期。初かねの儀式でお歯黒をつけている風景。



12. 「暦中段つくし」（豊国・画）／江戸期。お祝いの品々が並ぶ、かね始めの儀式当日の風景。



13. 絵双六「志ん板むすめ一だい記」（長谷川久美之助・画）／明治23年。女性の人生を題材にした絵双六。それぞれ右より、1段目：みやまいり（振り出し）、はつのせつく、てならい、おどり 2段目：しゃみせん、ぬいもの、ちゃのゆ、したがた（たいこなど） 3段目：こうきき、みあい、こんれい、いわたおび 4段目：げんぶく、おさん・わかさん、おいわい、ごいんきょ（上がり）。絵双六は、江戸から明治にかけて遊びや観賞用として発行された。多色摺りで図柄も豊富。振り出しから上がりまでの各コマからは、当時の風俗が浮かんでくる。「げんぶく」のコマではお歯黒染めをしている。

ワンポイント知識

黒豆を煮る時のお歯黒

お正月の黒豆を煮る時に錆びた釘を入れて、一晩黒豆を水につけてから煮た。これは、黒豆の皮に含まれるタンニンとお歯黒の鉄分が反応し、煮た黒豆に光沢が出て、防腐効果があった。これは、お歯黒が黒く染まる原理と全く同じである。



西洋編

et, Libraire, rue du Loup, n° 15

Le Cabinet d'un Dentiste.

見て楽しく、読んでおもしろい歯科の歴史には知られざる驚きがいっぱい。
我が国に先んじて医学を発展させた西欧諸国の 16 ~ 20 世紀の歯科事情を中心
に、肩の凝らない歯科の歴史の博物館へ皆様をご招待します。

歯ブラシと歯みがき剤 | 29

ヨーロッパで歯ブラシは、いつ頃から使われていたのだろう。記録では、1590年にスペインからフランスに伝えられたと言われている。貴族が使う歯ブラシは、豪華で銀製や象牙製の柄に見事な彫刻されたものだった。



西洋の歯ブラシ

古代人は歯をみがく時、自分の指や、木の枝の一端を噛んで潰し、繊維状にしたものを用いていたと思われます。現在のように、柄に馬や豚の毛を植えたタイプの歯ブラシは中国で考案され、シルクロードを経てヨーロッパに伝わりました。ヨーロッパの歯ブラシは、1590年、スペインからフランスにアントニオ・ペレソによって伝えられたといわれています。歯ブラシの柄は短いものから長いものまであり、材料は象牙や動物の骨で作られ、馬や豚の毛などが植えられていました。王侯貴族などの上流階級は、柄が金製や銀製、象牙製、アコヤ貝など贅沢な材料で出来た歯ブラシを使っていたのです。

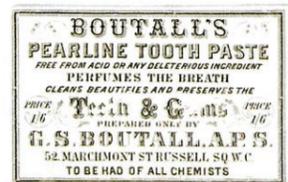
近代歯科医学の父と呼ばれたフランスのピエール・フォシャールは1728年刊の『歯科外科医』という本のなかで、「馬の毛の歯ブラシ等はごまごまして乱暴に使うと歯や歯ぐきを痛める」と書いています。そのため、彼は歯と歯ぐきを、ぬるま湯に浸した天然のスポンジ（海綿）で毎日ていねいにこすってきれいにするのを患者さんにすすめていました。



13 (上).
柄とキャップが銀製の歯ブラシ



13 (下).
銀製柄の歯ブラシ／柄に彫刻が施された贅沢品で裕福な人の所持品とみられる。



14. 歯みがきの陶製容器／真珠の歯みがき剤。「酸や有害物質を含まず、歯をきれいに保ちます。口臭防止用香料入り」と記されている。



15. ロンドン製歯みがきの陶製容器。「歯を白くし、白バラの香りの息づかいにするためのエレガントな歯みがき」とある。金色の枠で囲まれている。



16. 石鹸入り歯みがきの陶製容器

また、18世紀頃の動物の毛を植えた歯ブラシは出来が悪かったのです。現在の歯ブラシと違い、毛束が密で通気性が悪く、不潔であると非難され、毛嫌いする人も多くいました。当時、市民の衛生観念は低く、とりわけ庶民階級では歯の手入れもしない人が多かったため、口臭もひどかったといえます。

1935年になって、デュポン社がナイロンを開発し、1938年2月24日にナイロン歯ブラシが発売され、世界中に広まり使われるようになりました。

歯みがき剤

最初の歯みがき剤は、おそらく手の指などにつけて使った塩だと思われます。記録にあるのは、紀元前1550年にエジプトで考えだされたもので、その配合がパピルス（草から作った紙）に書かれていたそうです。歯みがき粉としては、緑青、緑の粘土、乳香、そして練り歯みがきには蜂蜜と火打石の粉、ときにはピンロウ（ヤシ科の常緑樹）の実を加えたとあります。また、ギリシャの医師ヒポクラテスは、大理石の粉末に野うさぎの頭の骨やねずみの骨を焼いて粉末にした

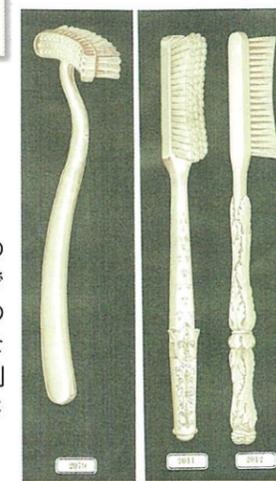
ものを混ぜて歯みがき粉を作りました。

フランスでは、貝、岩塩、いかの甲羅、明礬、浮石、焼いた牝鹿の角などを混ぜたものや液状の「水歯みがき」も使われていました。当時一部の理髪外科医（歯科医も兼ねる理髪師）は、白い歯を望む人にはたいてい強い酸を使って漂白していたので、歯を傷つけていました。フォシャールは、「多くの人が使っている歯をきれいにし、丈夫にする粉薬や練り薬、水薬は歯に悪いものが多い」と重ねて警告していました。

このように、古くから人間の知恵として歯みがき剤は、歯の清掃と同時に歯の美しさを保ち、むし歯や歯ぐきの病気の予防に効果がありました。一方、当時はお金儲けのための粗悪品も多かったようです。



17. 少女の絵葉書／「きれいな歯を持ちたいと思う子どもたちがしなければならないこと」と下にフランス語で書かれている。



20. 「ドイツで発行された歯ブラシのカタログ」／1915年頃ドイツで発行された歯ブラシのカタログの一部、現代ではほとんど見られない変わった形状や柄の部分に彫刻がされた高価な歯ブラシが掲載されている。

歯みがき粉の容器

17～18世紀のヨーロッパでは、陶製の容器に入った歯みがき粉が売り出されていました。上蓋には美しい絵画がカラーで描かれたもの、白地に単色の文字で「王室御用達」と書かれたもの、商品名や成分などが焼きつけられたものなどがありました。使用効果として、「歯と歯ぐきを健康に保つ」、「歯と歯ぐきを清潔に美しくする」、「歯ぐきを引き締める」、「歯を白くする」、「口臭防止用の香料入り」、「石鹸入り」などの文字を入れてアピールしていました。

容器は陶製以外にアルミ容器や紙袋などもあり、陶製はロンドン製のもの、アルミ容器はパリ製のものが多くありました。イギリスは有名なウェッジウッド社などがあり、陶器製造の技術が進んでいたのです。このような歯みがき粉は、「1週間に1回使う」と書いてあるものもあり、当時は値段が高かったと思われます。



18. ヨーロッパの歯みがきの陶製容器／美しい絵画がカラー描かれている。



19. シャボン（石鹸）入り歯みがき容器／アルミ缶、パリ製



21. ガラス製の歯みがきの容器／市販の歯みがき粉を移し替える。文字は銀線で埋め込まれている。

ワンポイント知識

西洋の凝った歯みがき容器

古代ローマ時代から、歯みがき粉は汚れを取り除いて歯を白くするために使われた。19世紀になると、香料や薬を入れて口臭予防や歯肉を引き締める効果を宣伝した。上流社会の人が使う歯みがき粉は、豪華な陶製の容器で売られていた。